



おすすめ書籍

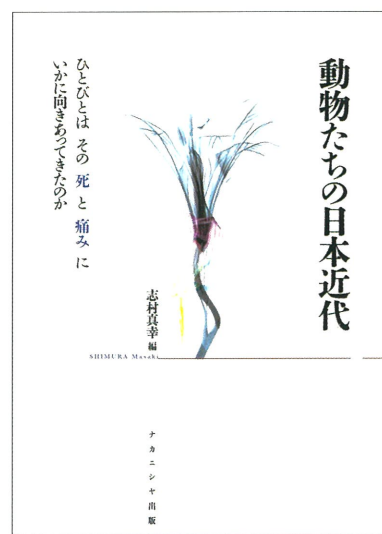
Recommended Books

動物たちの日本近代

ひとびとはその死と痛みにいかに向きあってきたのか

著：
志村 真幸(編)

336 頁 / 定価 4,400 円(税込)
ナカニシヤ出版 2023 年 9 月 1 日刊



●推薦者 浅川 満彦 (酪農学園大学 獣医学群獣医学類)

本書は獣医学・獣医療とは直接関連しないばかりか、比較文化学や民俗学、さらには動物愛護思想史やスポーツ文化史などの側面から著され、自然科学系ですらない。そのため、ここで紹介することが適切なかどうか、かなり逡巡した。しかし、動物虐待に対し、今日の多くの獣医師は直視しないとならず、現に、シェルター医学の専門家・西山ゆう子氏が本誌で連載されているのもその証左であろう。

一方、私はそのような状況とはあまり関係を持たなかったが、偶然、「法獣医学」の名称を冠した拙著を上梓し¹⁾、動物虐待の事例を列挙したが、その中でアイヌ民族による熊送りのような動物の命を奪う伝統的文化までを動物虐待と見なすのは無理があらうと記した。もっとも、しっかりした根拠に基づいての主張ではなかったのも、それ以来、若干の後ろめたさを感じていた。

そのような悶々とした状況で出会ったのが、近現代における動物の殺・死、あるいは動物への暴力を共通テーマ(『はじめに』より改変)に編まれた本書であった。本書本文は「家畜とペット」と「野生動物と魚」のパートに分かれ、前部には猟犬、家庭犬と軍犬などの訓練の歴史、「野犬狩り」から動物愛護または犬の殺処分等畜大行政転換、豚と山羊の飼育事例、家畜守護神の民俗、漫画に描かれた動物たちと言葉などが、後部には北海道と奈良公園のシカに関する事例、台湾産ミカドキジの帝国日本の関係性、採鳥対象「野鳥」の概念化と

鳥飼育への見方、動物の言語使用と人間的な振る舞いについての考察、有機水銀により汚染された海産魚による水俣病の現代史などについて計10章にわたり論考が展開されていた。

多様なモノゴトの論考は、これまで使ったことのない大脳の領域を刺激したが、私が読み込んだ直接的きっかけであった動物の命を奪って行う伝統的なコトそのものについての論述はなかった。それ自体、通常、「残念、次回に期待」なのだろうが、待つだけではなく、動物虐待と向きあい、問題点を見出した獣医師サイドが口火を切ってみてはどうか。

例えば、奈良公園における「神鹿保護」の中には、私たちがかつて行ったE型肝炎ウイルス感染症の疫学調査が引用されていた。民俗学から獣医学の情報が活かされていたことを純粋に驚いたが、それならば、我々の方も人文・社会系の分野に積極的に関わり(一所懸命、勉強し)、神事と動物虐待との関連性について共同研究を呼びかける時期にあると感じた。

このように、本文一つ一つの事例は、それぞれ出色であったが、これらを帰納した冒頭11頁分の『はじめに』の記述はとても参考になった。そこを一読するだけでも、私の漠たる思いはだいぶ解消された。例えば、これに出会う前、今日の動物愛護とはキリスト教圏発想の表現型であるという拙見を披瀝したが²⁾、一面的でいささか拙速であったと反省している。

【引用文献】

- 1) 浅川満彦, 2021, 野生動物の法獣医学—もの言わぬ死体の叫び, 地人書館, 東京: 254 pp.
- 2) 浅川満彦, 2023, 法獣医学が欧米で成立・発展した背景にキリスト教は影響したのか, 北獣会誌, 67: 427.

※NJKは、みなさんで作る雑誌です。症例紹介、ご質問、ご意見をお寄せください。